



Title	アメリカの二つの中欧研究誌について
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Citation	北大法学論集, 18(3), 138-146
Issue Date	1968-01-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16092
Type	departmental bulletin paper
File Information	18(3)_p138-146.pdf



資料

アメリカの二つの中欧研究誌について

矢田俊隆

最近のアメリカ合衆国の歴史学界にみられる一つの著しい特徴は、中部ヨーロッパに关する研究が非常に盛んなことである。いま試みに、最近数年間の *Journal of Central European Affairs*, *Austrian History Yearbook*, *Journal of Modern History*, *American Historical Review*, *Slavonic and East European Review*, *American Slavic and East European Review*, *Slavic Review*, *American Slavic and East European Review*, *Slavic Review*, *Foreign Affairs*, *Journal of Economic History* などの定期刊行物を開いてみると、そこには、アメリカの学者たちによるこの分野についての数多くの研究論文や書評をみいだすことができるし、また、最近アメリカ人によって出版されたこの方面の

著書も、おびただしい数にのぼっている。そのうち、ハプスブルク帝国史をテーマにした研究書の近況については、すでに別稿で紹介した通りである（スラブ研究へ11頁一八九七・拙稿参照）。ところで、これらの定期刊行物の大部分は、一般史的研究誌であるか、あるいは、ロシアおよび東・中欧全体をふくめた専門誌であるが、しかし、それらのほかに、アメリカ合衆国が、特に中欧だけを対象にした二つの専門的研究誌をもっていることは、われわれの注意を引かずにはおかない。それは、前掲のうちの一つ、すなわち *Journal of Central European Affairs* と *Austrian History Yearbook* であるが、この両誌については、従

来わが国ではあまりよく知られていなかった傾きがあり、そこに掲載された論文もなお十分に利用されていないように思われるので、この機会に、その輪廓を紹介してみたい。

さて、ここに取りあげようとする二つの刊行物にとって、一九六四―六五という年は、大きな意味をもっている。というのは、二十三年間のながい歴史をほこった前者が、一九六四年にその刊行を停止し、翌六五年、これにとつてかわるかのように、後者が発足したからである。そこで、まず前者からみてゆきたい。

Journal of Central European Affairs (以下 *Journal* と略記する) の出版にかんして、實際上その中心になって活躍してきたのは、終始一貫して、Colorado 大学の S. Harrison Thomson 教授であった。Thomson 教授は、現在アメリカ合衆国における中欧史学界の大御所の一人であり、中欧の多くの言語と文献に精通しているうえに、チェヒ人およびスロヴァキア人とながいつきあいのある碩学で、名著 *Czechoslovakia in European History* の著者として、広くその名を知られている。この書物は、数十年にわたる深い学殖から生まれた堅実な研究で、見方も公平であり、歴史研究のもっともすぐれた総合の一つであるといわれている。そのうえ教授は、アメリカのマサリツク義勇兵の生き残りという

経歴をもつだけあって、この書物は、チェヒ民族運動にたいする教授の深い共感にささえられて、人間的な興味という点でも、読者の心をつよくうつものがある。

ところで、この Thomson 教授の回想 (*Journal*, Vol. XXIII, No. 4, 1964 January) によれば、*Journal* の創刊は、第二次世界大戦と不可分の関係をもっている。この雑誌をはじめという考えが教授の頭に最初に浮んだのは、第二次大戦がはじまってまもなくのことであった。当時ヨーロッパでは、ナチの圧制のもとに中欧地域の歴史や諸問題についての研究は、ほとんど沈黙せざるをえない状態にあり、そこで、中欧全地域の歴史と諸問題にかんする研究がなお自由に発表できるような公共の広場を、少なくともどこかにつくるための努力が必要であると、考えられたのであった。しかし、当時にあつて一種の冒険とも思われたこの企てを特に促進したものは、一九四〇年夏のフランスの崩壊であった。その結果、パリでは、*Revue des Etudes Slaves* 誌の刊行がストップし、またほぼ同じころ、ロンドンの *Slavonic Review* の事務所も、爆撃されてしまった。

そこで、教授は、アメリカ合衆国の同僚たちの援助と激励をうけつつ、また、可能なかぎり中欧の学者たちとも連絡をとりなが

料ら、苦しい努力を重ね、ついに一九四一年四月に、Journalの第一号が目の目をみるにいたった。その時の予約者は一〇四名だったとのことであり、はじめのうちは一号が出るたびに、はたして次の号が刊行できるかどうか、まったく見当のつかない状態であったという。

しかし、幸いにもこの雑誌は、その後二十三年間継続して毎年四回づつ発行され、Thomson教授の行きとどいた編集と充実した内容とによって、力づよい発展の道をたどった。この間刊行の継続が可能であったのは、第一に、教授が職を奉じたColorado大学が一貫して財政的支持をあたえたことによるものであり、特にRobert L. Staerns 学長とW. Farrell Dyde 副学長の在職中の配慮は、大いに力があつたことである。第二に、Ford 財団からの助成金および他の諸団体からの若干の助成金も、一定の発行高を維持するうえに、寄与するところが大きかった。

この雑誌の最終段階における編集委員の顔ぶれば、次の通りである。

F. Lee Bennis, Indiana University

Cyril E. Black, Princeton University

Willard A. Fletcher, University of Colorado

Charles Jelavich, Indiana University

Oscar Halecki, Fordham University

Reginald Lang, Carleton College

Ralph H. Lutz, Stanford University

Philip E. Mosely, Columbia University

Otaek Odložilik, University of Pennsylvania

R. John Rath, Rice University

William J. Rose, University of British Columbia

そして、その編集主任は、いりまぐさなへ S. Harrison Thomson 教授であり、ほかに補助編集者 Edward J. Rozek, University of Colorado・編集助手 Aline Stone 両氏がいた。

さて、この雑誌の基本的立場は、毎号の巻頭にかかげられてきた次の言葉に、要約されている。「過去の諸事件や現在の諸傾向について、対立する意見や解釈がこの雑誌のうちに呈示されることは、いっこうにさしつかえない。これらの意見は寄稿者の意見であつて、その名前は、当該論文や書評に書き添えてある。本誌の編集方針は、寄稿者の卒直な意見や結論の基底に、穏健な叙述や健全な学問性が存在するかがざり、このような自由な、またさまざまな意見の表示を、奨励することである。しかし、どんなこと

があっても、個人的、人種的、民族的な論争は、掲載されないのであろう。真理と平和の問題が、表現の痛烈さによって進められることは、めったにないからである。「すなわち、この雑誌をなやませた原理は、一言でいえば、学問的自由主義とよむことができる。この立場を堅持することによって、本誌は、学界に貴重な貢献を行なうことができたのである。

ところで、この雑誌の意味する中欧とは、表紙の地図が示すように、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー、オーストリア、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、ルーマニア、バルト沿岸諸国、それにドイツ、ロシア、イタリアの一部をふくむ地域であり、その取りあつかうテーマは、政治、外交、社会、経済、文化など、歴史の広い範囲に及んでいる。その記事の構成は、論文と書評が主体であるが、他雑誌に掲載された関係論文の一覧リストもつけられており、アメリカのスラブ研究者や東・中欧研究者からの寄稿が大部分を占めるが、国外からの寄稿もあり、その質的に高い水準とヴァライエティにとんだ内容と能率的な編集のために、中欧関係の唯一の専門的な研究誌として、学界に確固たる地歩を築き、ながいあいだ研究者に大きな便宜をあたえてきた功績は、絶大なものがあったといつてよい。いま参考までに、最

終号 (Vol. XXIII, No. 4) の目次を、次にかかげておこう。

Articles

Palacky and his History of the Czech Nation... J. F. Zacek
German Catholics and the concept of An International Party
1900~1922... J. K. Zender

French Diplomats in Poland 1919~1926... P. S. Wandycz

Yugoslavia and Rumania, 1941... K. St. Pavlowitch

Historical Research in Rumania... Frederick Kellogg

Notes

Book Reviews

Recent Periodical Literature

ところが、一九四六年一月をもって、この雑誌は突然刊行を停止するにいたった。その理由は、つまびらかにされていないが、Thomson 教授が停年で Colorado 大学を引退したため、同大学から財政的援助を得ることが困難になったことが、大きな原因の一つであるといわれている。この刊行停止は多くの人々から惜しまれ、関係分野の研究者たちのあいだでは、同誌の復刊またはそのあとを受けつぐ新雑誌の計画があれこれとめぐらされているようであるが、なお実現のはこびにはいたっていない。しかし、こ

料の雑誌にのった論文のうちには、現在もなお価値のあるものが多く、自分のあいだ、この雑誌は依然研究者にとって不可欠の資料でありつづけるであらうし、わが国の中歐研究者は、いままでより以上に、それらを利用する必要があるであらう。

次に、*Austrian History Yearbook* (以後 *Yearbook* と略記する) は、*Journal* が刊行を停止した翌年の一九六五年に創刊されたが、*Journal* と直接にはなんの関係もなく、またいろんな点で、*Journal* とはちがった特色をもっている。そこで、以下両者を比較しながら、*Yearbook* の特色を取り出してみたい。

Journal が *Colorado* 大学の *Thomson* 教授の個人的な努力と活動にまつところが大きかったと同じように、*Yearbook* の中心的な人物は、*Rice University* の *R. John Rath* 教授である。教授は、*Thomson* 教授より一世代近く若い、十九世紀オーストリア史のすぐれた研究者で、その著 *The Viennese Revolution of 1848* は、新しい史料を駆使してヴィーンの三月革命の実態を明らかにした好著であり、わが国でも広く知られている。*Yearbook* 創刊の由来は、第一号の冒頭にかかげられた、同教授の刊行の辞のうちに、説明されている。それによれば、この年報の前身は

Austrian History News Letter で、これは一九六〇年から始められたものである。一九五七年にアメリカ合衆国で *Committee to promote Studies of the History of the Habsburg Monarchy* がつくられ、*Rath* 教授は、その *executive secretary* となり、アメリカ合衆国とカナダでの、この分野にかんする出版物および研究計画の調査を行なうことになったが、それによって、この方面の研究者の数が非常に多く、しかも年々増加しつつあることを認識した。そこで教授は、これらの研究者たちに、かれらがそれぞれどのような特殊な関心をもって研究に従事しているかを相互に知りあわせ、またアメリカとオーストリアで最近どのような研究と出版が公けにされているかを知らせるための機関をもうけることが、斯学の発展のために必要であることを痛感し、アメリカ、オーストリア両国の学会の協力と、*Texas University* の経済的援助を得て、一九六〇年 *Austrian History New Letter* の第一巻を世に送ることができた。その後これをさらに発展させ、*Rice University* の経済的援助を得て、一九六五年には質量ともに一段と充実をはかり、年報の形に改めて *Austrian History Yearbook* 第一巻を刊行し、本年までにすでに三冊を送るにいたっている。以上の経過から知られるように、この年報編集の本拠は *Rath* 教

授を中心とする Rice University のスタッフであり、その刊行の継続も、Rice University からの助成金によって可能になっているのである。

次に、第一号の巻頭にかげられた Rice 教授の創刊の辭のなかから、この年報の編集方針を示している最後の部分を、引用しておこう。「オーストリア史年報は、国民的な刊行物ではなく、国際的な刊行物であることを意図している。またそれは、なんら特殊な党派や見地を代表するものではない。その方針は、注意深く健全な学問性から生まれるものであるかぎり、そして個人的、民族的、イデオロギー的な論争にたずさわろうという気持から生まれるものでないかぎり、どんな意見でも、その自由で卒直な表示を奨励することである。ちがった立場の表明を促進するために、密接な関係のある分野で仕事をしている他の学者が、発表されるさまざまな論文を批評することを、要請されるであろう。さらに、アメリカの学者の手になる書物は、書評してもらうためにヨーロッパの歴史家に送られるであらうし、またその逆のことが行なわれよう。

この年報は、アメリカ合衆国と外国の双方の学者にとって、研究の口として役立つものとするものである。寄稿の多くは、ア

メリカとオーストリアの学者によることになるが、オーストリアの歴史に興味をもつあらゆる国の研究者が、論文、文献解題のリスト、自身のまた同僚の出版活動にかんするニュース記事などを提供して下さることを、大いに希望する。しかし、明白な理由のために、各号の一切の内容は、ハプスブルク帝国および、一八一年以後のオーストリアまたはハンガリーの歴史を、主としてないしはもっぱら取り扱うものであることを、強調しなくてはならない。」

この説明から、Yearbook もまた Journal と同じように学問的自由主義の立場にたつものであることがうかがわれ、この精神が本年報の価値を高いものにしていくが、同時に本年報が Journal といういろいろちがう点をもつことも、理解される。まず第一に、Journal が中欧全地域を対象とするのたいして、Yearbook はオーストリア、詳しくいえば、一九一八年までのハプスブルク帝国の版図と、一九一八年後のオーストリア、ハンガリー両国内容を限定している点は、大きな特徴である。第二に、前者が主としてアメリカ合衆国を中心とするものであつたのたいして、後者は、もっと広い国際的な性格をもっており、編集委員にも、アメリカ合衆国の The United States Committee to promote

料 Studies of the History of the Habsburg Monarchy の
Hans Kohn (chairman), College of the City of New York
Charles Jelavich, Indiana University
Robert A. Kann, Rutgers University
Arthur J. May, University of Rochester
S. Harrison Thomson, University of Colorado

の五氏のほかに、オーストリアの
The Austrian Committee for the history of the Austro-
Hungarian Monarchy から次のメンバーが加わっており、この分
野の世界的な権威を多数もたらしている。

Friedrich Engel-Janosi, University of Vienna

Hugo Hantsch, University of Vienna

Fritz Felner, University of Salzburg

第三に、この年報は、出版以来なお三冊を世に送ったにすぎないが、前述の基本方針のうえに、まことに見事なできばえを示している。論説欄も、この方面の大家たちの含蓄にとんだ文章や中堅、新進学者の野心的な研究をとりまぜ、すぐれているが、特に注目されるのは、書評欄の充実ぶりだ。Biographical Information 欄に非常な力点がおかれていることである。これは研究者

に多大の便宜をあたえるものであり、わが国の学問的機関紙のあり方にも示唆をあたえる点が多い。とりわけわれわれの関心を惹きつけるのは、東欧共産圏諸国の学者による各国学界の近況報告——たとえば第一号の Hanak 教授によるハンガリーの学界動向や第二号の Koralka 教授によるチェコスロヴァキアの学界動向など——が次々に掲載されていることであり、このことが可能になったのは、最近の東欧共産圏における学問の自由化現象とも深い関係があると思われるが、学問の国際的な協力発展という点からいって、まことに貴重な成果をあげているといえよう。

こうして、この年報は、毎号三〇〇ページをこえる大冊として国際的にきわめて重要な役割をへたし、ある意味で Journal なきあとこれを一部補う機能をもあわせはたしている。(Yearbook の編集委員のうちには、Journal の編集委員であった人もたくさん加わっている。)特に、ハンディキャップの多い日本でオーストリア史研究にたずさわられるわれわれにとっては、まことに有益な不可欠の刊行物といわねばならない。今後、日本の学界は本誌を十分に活用する必要があるだろう。最後に、本年報第一号の目次をかかげて参考にとともに、この年報がますます健全な発展をとげることを希望して、筆をおくことにする。なお、本年春刊行

られた第三号には、昨年四月アメリカ合衆国のインディアナ大学で開かれた「十九世紀のハプスブルク帝国における民族問題」を主題とする国際研究集会のペーパーの一部が収録されていることな、付記しておく。(この研究集会については、史学雑誌・昭四一・三の拙稿参照)。

Volume 1 1965.

Articles

Obiter Dictum.....R. J. R.

Reflections on Austrian History.....Hans Kohn

Pan-Slavism, Austro-Slavism, Neo-Slavism : The All Slav Congresses and the Notionality Problems of Austria-Hungary.....Hugo Hantsch

More sources on Metternich.....A. C. Breycha Vanthier

Jelacic, The Croatian Military Border, and the intervention against Hungary in 1848 Gunther, E. Rothenberg

Jelacic and the frontier in modern history.....Wayne Vunich

Reply to the comments.....Gunther E. Rothenberg

Some Reflections on Conrad von Hötzendorf and his

Memoirs based on old and new sources.....Solomon Wank

Comments.....Fritz Fellner

The Austrian Presidency, 1918-1959.....Eric C. Kollman

Comments.....Robert A. Kann

Reply.....Eric C. Kollman

Karl Renner and Austria in 1945.....Douglas W. Houton

Comments.....Eric C. Kollman

Bibliographical Informaiton

Recent Hungarian Literature on the History of the Austro-Hungarian Monarchy,1848-1918. A historical survey..... Péter Hanák

Recent French Publications on the Habsbury Empire and the Succession States (1952-1962).....Victor L. Tapié Assisted by Modeleive Foisil

Recent Czech and Slovak Literature on the History of the Habsburg Monarchy : A bibliography.....Peter Burian

United States Publication on Austrian History.....

Doctoral Dissertations in the United States.....

Austrian and German books on Austrian History from 1648

資料

to the present published since 1945.....
Recent Austrian Periodical Literature for the period from
1648 to the present.....
Austrian Doctoral Dissertations on the History of Austria
from 1648 to the present.....

Book Reviews

News

Special Announcements

(一九六七・一〇・一八號)

**On the two special periodicals of the
Central Europe researches in the
United States**

Toshitaka YADA

1. Journal of Central European Affairs
2. Austrian History Yearbook